

# Extracurricular activities of UT students

## 〔特集〕 東大生の課外活動

東大生も本来の学業以外に様々な課外活動を行っています。  
学内のみならず大学の外で、時には世界を対象として、  
実に多くの様々な活動に積極的に参加しています。  
今回の特集では、いくつかの活動について、  
学生・院生自身や顧問教官に語っていただきました。

「総長賞とは」

東京大学が学生の優れた業績（課外活動または学業）に対して表彰する制度で、平成14年3月19日に「東京大学学生表彰実施要綱」に基づき実施されることになった。

## 応援部紹介

—顧問教官より

応援部長

菅野 和夫

26対1。私が過去八年間に神宮球場で応援部諸君と一緒に野球部を応援したときの、最悪スコアである。もちろんこれは例外的大差であって、野球部も全力で健闘し度々好プレーも見せてくれるが、如何せん劣勢一方となることもしばしばである。

東大応援部の真骨頂は、どのような大差であれ、応援席に対して、試合はまだまだこれから、大逆転に向かおう、と意気盛んな応援を続けられる点にある。それには、自らを奮い立たせる体力、精神力、統率力、愛校心などが必要であり、また、意気消沈した応援席をのせていくリーダーを伴った演技力が必要である。このような部員諸君のひたむきな応援は誠にいじらしく、神宮球場では、東大生でも卒業生でもないおじさんたちが数名、毎試合、学生応援席に陣

取って、応援部の応援を応援している。総長賞において、「度重なる敗戦にめげず…」と、東大応援部の独特の苦勞を表現して下さったご配慮には、感激している。

忘れずに付け加えておきたいのは、応援部諸君も、実は、勝利を待ち望んでいることである。野球部が神宮で一点でもとれば「それいけ」と過剰に勢いづき、たまに勝利すると天下を取ったように狂喜乱舞する。チアリーダーの諸君などは、涙を流して抱き合っている。彼(彼女)らにとっても、ひたむきな努力が報われたときの感激は格別なのである。

応援部の運動部としての特色は、自分たちの競技のためではなく他部の競技のために存在する点である。応援部は、野球部のみならず、アメフト、ボート、陸上競技、等々さまざまな運動部の競技を応援し、運動会全体の盛り上げに努力している。このへんのところを、総長賞の賞状で「他の運動部の信頼も厚く」と表現していたのは、日ごろの努力が報われた思いである。私が応援部諸君の活動に肩入れするのも、他者に奉仕するという、現代社会では忘れられがちな、その貴重な精神にある。

第一回総長賞受賞団体

## 幾多の敗戦にもめげず 熱く応援し続けた功績

東京大学運動会応援部主将

法学部四年

塩沢 勇人



「学生の愛校心を喚起し、  
学内振興の推進力となる」こと

我々東京大学運動会応援部はリーダー、吹奏楽団、チアリーダーズの三部門で成り立っております。現在部員数は九一名(内女子四六名)を擁しており、春秋の東京六大学野球リーグ戦をはじめとする各種運動部の応援活動を行っております。

当部の本年度の活動方針は、「学生の愛校心を喚起し、学内振興の推進力となる」ことです。一見、応援活動自体には直結しないような方針に思われるかもしれませんが、以下のような考えに基づき定めました。現在東大は学問、スポーツ等全般においてその地位が低下していると言われております。私はこの根本的な原因は愛校

心の欠如であると考えます。一般に、自分の所属する団体にアイデンティティを持ち、何事にもその団体の威信をかけて成し遂げようという気持があれば、通常よりも遙かに大きな成果を挙げることができます。大学でいえば愛校心がそれです。また、対抗意識というものは愛校心を高める重要な要素として働きます。早稲田であれば慶應には負けられない等といった意識です。

しかし東大のように「最高学府」となると中々そういった意識は芽生えません。多くの学生は東大の名を意識する事なく好き勝手にしており、母校などには無関心なのが現状であります。結果、学問においては他大学の追隨を許し、国際的地位も低下、スポーツにおいても芳しい成績が残せなくなりました。

以上のことより、学内の振興のためには、先ず学生の愛校心を喚起することが肝要であると考えます。そうした際、スポーツの応援は、対抗



意識を誘起し愛校心を育てる最も簡単かつ有効な手段です。応援部は、学生に母校の応援を促すことで愛校心を喚起し、結果として学内振興を果たすべく活動に励んでおります。多くの学生が愛校心を取り戻せば学内は自ずと活気づき、東大は再び名実共に「最高学府」の地位に返り咲く事でしょう。これこそが、当部の今年度の活動方針なのであります。



第一回総長賞受賞者  
最年少七大陸  
最高峰制覇



経済学部四年  
山田 淳

人類がエベレストに登頂して五十年になる。初登頂よりこれまで日本人の登頂者は一〇〇人を越え、世界各国からも多くの人が集まり、登頂を目指している。登山許可料の高騰にもかかわらず、登山者は増加する一方だ。

こうして、登山ノウハウが蓄積していくにもかかわらず、死亡事故の連続記録という不名誉な記録がいまだに更新されつつつけている。これは、高所登山には不確定要素がつきものなのだ、と解釈されることが多いのだが、登頂率もそれほど変化していないことを考えると、実はノウハウが蓄積されていない、または蓄積されても利用されていないのではないかと考えられる。

この状況は、エベレストを考えると想像が難しいかもしれないが、僕が登ってきた七サミッツの各山、つまり各大陸の最高峰すべてで同じ

ことが言えた。また、日本の山々でも同じ事が起こっている。つまり、ハイキングブームで多くの人が登り、そして事故も多くなっている。

技術の伝達は、世代の循環と同じく動く場合はうまくいく。しかし、最近の登山ブームで中高年で登山をはじめた人が多くなったことにより、技術の伝達がうまくいかず、危なっかしい登り方をしている人たちが多く見かけるようになった。

僕はこれまで山からいろんなことを学ばせてもらった。七サミッツの登頂を通じて、喘息からくるコンプレックスも解消させてもらった。今は、ガイドや講演を通じて、より多くの人に登山の楽しさと厳しさの両面を伝えていくのが僕にとつての山への恩返しであろうと考え、それに取り組んでいる。



エベレスト頂上でノートパソコンを開く

\*7サミッツの最高峰

1. アフリカ最高峰	キリマンジャロ	5,895m	1999年
2. 南米最高峰	アコンカグア	6,960m	2000年
3. 北米最高峰	マッキンリー	6,192m	2000年
4. 欧州最高峰	エルブルース	5,642m	2000年
5. 南極最高峰	ビンソンマンシュ	4,897m	2001年
6. オセアニア最高峰	カルステンツピラミッド	4,884m	2001年
7. アジア最高峰	エベレスト	8,848m	2002年



アコンカグアでのテントの中で



エベレスト最終キャンプ出発直前

東大内外での素晴らしい先生方や友達との出会い。その恵まれた環境で学業に勤しみながら多岐にわたる課外活動に取り組み、地域社会との関係を結んできた。東大には「赤門華風」という学生新聞があるが、私も一関係者として「和」の交流促進に携わってきた。

またお台場にある「小さな国連村」と呼ばれる大学村に住んでいるおかげで、お台場から世界に向けての様々な国際交流活動にも参加してきた。そして、一九九九年三月中国の植樹の日に「東京大学緑色文化国際交流促進会」という日中の学生からなる学際的なネットワークを形成し、経験や専門知識及び人的ネットワークを活かして、現場での実践活動も実施し続けてきた。普段は主に「緑の文化」をめぐって学際的に交流しながら長江上流域において緑化や環境教育活

第一回総長賞受賞者  
 顕著な国際・社会貢献  
 赤門「和」風



大学院農学生命科学研究科博士課程三年

和 愛軍

動にも努力してきた。

学内では一回目の学位記展などに協力し、総合研究博物館にて関連活動の展示も行った。学外では、上記大学村にて日本国際教育協会主催のフェスティバルの場でも積極的に協働型植林や環境教育活動の写真とビデオなどを展示し大きな反響を得た。さらには、恩師のもとで日中林学会の交流活動にも協力し友好を深めてきた。

一学生として時間と能力の限界はあるが、研究調査や勉学に関連する活動を展開する中で、ある程度の社会貢献や文化の創造ができる実感している。意義ある活動を積極的に遂行することによって「感性」や「身学」「耳学」も磨け、自然や社会の中で視野を広げることできる。学業と課外活動の相乗効果は存在し、実学には理論と実践の両方が不可欠である。国境や世代の壁を超えた体験や交流を通じて人生が変わったという人も多い。東大から「地球キャンパス」を舞台に、持続可能な発展に向けて反省しながら複眼的に思考すれば、課内では学べないことが課外活動を通じて発見できることも多々ある。いつも情熱や「愛と善良な心」をもって、地味でもこつこつと努力して様々なストックを積み重ねていければ、持続可能なフローが期待でき、誰もが充実した人生を送れるであろう。



長江植林ツアー統括・東大「緑色文化国際交流促進会」会長の和愛軍

「赤門華風」：公式ホームページ

<http://www.tokyochinese.com/cmhf/index.asp>



東大緑のボランティア隊と現地との共同作業（長江上流域の大具郷にて）



日中・老少協働植林の喜び



雲南省における長江沿いの段々畑と植林地

留学生と  
 外国人研究員のための  
 日本語交流・支援プログラム

FACEの活動紹介

留学生センター 教授

栖原 暁

FACE(Friendship And Cultural Exchange)は、本学に在籍する留学生(約二〇〇〇人)、外国人研究員(約一六〇〇人)及び彼らの家族と日本人ボランティアを一对一で組み合わせ、一人一人のニーズに応じた交流支援活動を「日本語で」行う、自由度の高いボランティア・プログラムです。留学生センターの談話室などで週一回程度会って、日本語で会話をしたり、日本語の質問を受けたり、書類やレポートの作成を手伝ったりしています。役所などに行ったり、生活相談に乗ったり、時には留学生等を自宅に招いたり、各所に見学に出かけたりすることもありますが、現在八五〇人ほどのボランティアが登録されていますが、このうち本学日本人学生が一六五人、本学教職員が三一人です。「教える」ことよ



文京区民センターで行われた文京区国際・フェスティバルでのステージのひとつ。本学に在籍するパキスタンの人たちによる踊り（2003年3月1日）

りも「教えられること」「学ぶこと」の方が多くというのが、ボランティア連絡会などで多くのボランティアが口にする感想です。

春と秋には、F A C E登録の日本人学生が中心となって、新規来日留学生に対する歓迎を兼ねた懇親会やキャンパス・ツアーが行われています。また文京区国際協会ではF A C Eボランティアが中心となって開催される七夕会、年末交流会などがこの数年恒例化し、今年三月には文京区国際フェスティバルがF A C E登録留学生等の協力で実施されました。東京大学同窓会「銀杏会」の方々もF A C Eに協力しています。

昨年これらの方々を中心となり「留学生と交流する会」が発足し、毎月のように見学会などが行われています。F A C Eは学内外を問わずだれでも参加できるとても楽しいプログラムですので、興味のある方はぜひface@ic.u-tokyo.ac.jpまでご連絡下さい。



新規来日者との懇親会の後、学生ボランティアの先導でキャンパスツアーに出発（2003年4月）



留学生談話室で留学生とボランティアが楽しくおしゃべり（2003年4月）

駒場祭エコプロジェクトでは、駒場祭における環境対策を行っています。私たちは駒場祭における環境負荷の低減と共に、来場者及び参加学生の意識に訴えかけることで、社会全体への波及効果を目的としています。

実際には、「ゴミのリサイクルルート」を考え、処理業者、容器を選定し、当日には徹底した分別により、リサイクル率を維持しています。また、排出されたゴミ袋を一つ一つチェックし、分別が不十分な場合には学生自らに再分別を促してらっています。ゴミ箱に人がついて来場者に分別指導を行う「来場者用ゴミ箱」やゴミの処理後の行方、家庭でできる環境対策などを展示した「エコブース」の設置など、多面的な広報活動も同時に行っています。

昨年の駒場祭では、ペットボトルのリサイクル

## 学園祭の環境対策の先駆けとして 駒場祭エコプロジェクト



教養学部理科一類二年

山本 勝也

ル工程を破砕されたペットボトルから段階を追って展示したところ、いつも何気なく捨てているものがこんな風になるのかと多くの人に感心を持ってもらうことが出来ました。

今年で七年目を迎えるエコプロジェクトは学園祭の環境対策の先駆けとして、これまで多くの大学に少なからず影響を与えてきたことは自負しています。しかしながら、私たちは現状の活動に満足することなく、今後も来場者の方々の通してさらなる社会への発信を進めていきたいと考えています。



来場者用ゴミ箱の様子



エコブースの様子

我々音楽部コールアカデミーは、入学式・卒業式その他、年三回の演奏会を中心に活動している男声合唱団です。

しかし我々の活動の真の中心は、なんとといっても練習です。その上で、いい演奏にするとか聴いている人に満足してもらおうこともさることながら、まずは自分たちが楽しめることが大切だと考えております。悪く言えば単なる自己満足が、結果として他の人の満足にもなることから喜ばしい、といったスタンスでしょうか。アマチュアであり学生団体である以上、この姿勢はそうおかしいものではないと思います。

しかし社会・文化への貢献という見地からすると、自分たちで楽しむだけでなく、積極的に自分たちの活動を外部へ情報発信すべきだと考

## 情報発信の必要性

音楽部コールアカデミー



工学部物理工学科三年

宮蘭 侑也



東京大学音楽部コールアカデミー第49回定期演奏会

えます。特に、昨年の一月・十月のアジア諸大学とのジョイントコンサート開催を通して、この必要性を強く感じました。

確かに、演奏会は大変感動的なものであり、アジア交流の新しい流れを作る意義深いものになったと思います。しかし演奏会の啓発がうまくいっていれば、もっと多くの人たちがこの感動を分かち合え、もっと力強い流れを作ることだってできたはずですが、この演奏会を通じた、大きな反省点のひとつであります。

「情けは人のためならず」などという使い古された言葉もありますが、学生の活動の社会・文化への貢献は、自分たちの活動の発展にもつながると思います。情報発信はその第一歩であるといえるでしょう。



公式ホームページ

<http://www5d.biglobe.ne.jp/~walkman/chor/>

## チーム目標は日本一!

ラクロス部



ラクロス部主将 工学部四年  
清水 智史

男子ラクロスは、先端にネットのついたクロスというスティックでボールを操り前線へ運びゴールを奪う球技。アメリカインディアンの発祥で、その激しさと時速一六〇km超の球速から地上最速の球技と呼ばれる。

ラクロスは四年に一度ワールドカップが開催される。ワールドカップに出場する、日本代表(学生・社会人の枠に関わらず選考される)やU-16の日本代表、さらにオーストラリアやハワイに遠征するU-19、日本代表、関東地区代表、関東ユース代表選手が、毎年東京大学

運動会ラクロス部男子から輩出されている。さらにチームとしては四年連続関東学生一部リーグベスト4。昨年は日本体育大学を破り、社会人も参戦する全日本選手権ベスト8。チーム構成員は二〇人に達する勢いである。今年のチーム目標は「日本一」。

このエネルギーは「東大から日本へ書く感動を巻き起こす集団でありたい」というチーム理念から湧き出すものだ。東京大学において運動会でスポーツをする意義はただ勝つことではない。我々は強く、楽しく、人間として魅力あふれる集団でありたいと考えている。東京大学のスポーツ集団であるからこそ、日本を代表するスポーツ集団でありたい。日本赤十字社に協力し、駒場キャンパスでの献血推進活動にも積極的に参加しているのも理念を貫く行動の一部である。

運動会全体と、創部十六年と歴史の浅い運動会ラクロス部に暖かい声援と理解を頂けると嬉しい。さらにグラウンドや各施設の充実が図れば幸いである。

ラクロス部部长 大学院医学系研究科 教授

## 山本 一彦

ラクロス部は創部十六年と運動会の中でかなり新しい。伝統を重んじる大学にあって、多少肩身の狭い思いをしているのではと推測するが、そんなことはお構いなしに、澁利と平然と日本一を目指している。最近の若者は熱く燃えることが少ないと言われるが、大きな情熱を傾け、いかに目標を突破するか真剣に考え、それを実行する集団は見ていて気持ち良い。そこでの激しいトレーニングが、激しい議論が、すべてが、血となり肉となり力となつて、若者一人一人とその有機的連帯であるラクロス部の宝となつていくだろう。



Under-21 日本代表の二人



豪雨の中、一橋大学を破り関東ベスト4 (2002年)

## 世界で唯一のクラブ！ 東大襖クラブ



薬学部四年

荒川 博

私たち東大襖クラブは、東大生が襖・障子の張り替えを行う、ユニークなサークルです。本職の表具師から伝授された張り替えの技術を、一九五四年の創立以来伝承し続け、今日に至っています。

新入生歓迎期に講習会を開いて襖張りを演習し、その上で、実際に襖を張る練習をしながら行います。張った襖は、担当者が採点を行い、合格と認められた人のみが部員になります。この難関を通過してきた十五名の部員によって、現在は運営されています。活動の中心は駒場キャンパスで、キャンパスプラザの部室には、襖や障子、板戸などの建具や、張り替えの道具を完備しています。

襖は、木の骨組みと、層状に張り重ねた紙か



ら成り、通気性と保温性に優れています。襖は、夏は高温多湿で冬は寒いという日本の気候にあわせて考案、改良され、長い歴史の中で定着した日本独特の文化なのです。襖を張り替えることで、紙質によって異なる風合いや、多様な図柄を楽しめます。襖は、日本家屋の住環境を向上させる機能を持つばかりでなく、インテリアとしての機能も兼ね備えています。

最近では、和室が減り、襖を楽しむ機会が少なくなっているのは残念なことです。私たちは、五月祭や駒場祭で襖の張り替え実演を行い、襖の良さと張り替えの技術を紹介しています。また、

日頃研鑽を重ねている張り替えの技術を生かすべく、学生ならではの格安価格にて、一般のご家庭でも張り替えをしています。



## 医療福祉社会情報基盤の設計と構築を目指して

特定非営利法人  
NPO 救命促進情報センター



大学院学際情報学府博士課程二年

中村 直行

ITの急速な発展に伴い、一方で表現の自由と至便さの追い風を受けインターネットにおいて情報の受発信が急増したと思われるが、他方で情報の正当性や安全性の根拠が課題となってきた。非医療従事者を対象とした医療情報の中では、特に疾患別死亡率一位である癌に関する補完代替療法の情報が一九九〇年代後半から受発信される情報量を増加させている。

そこで、「わが国における癌の補完代替療法の情報の研究」というテーマで研究に取り組む傍ら、二〇〇一年一月に社会や情報文化に対するさまざまな貢献を自論み、友人・知人・恩師を始めとする志を同じくする方々のご協力とご支援のもとにNPO法人「救命促進情報センター」を組織しこれを立ち上げた。専門病院・治療法・

治療薬を中心とする医療情報の集積とデータ化および提供、セカンドオピニオン事業の推進、非医療従事者への啓発活動を主目的とする講演会の開催、厚生労働省の研究班への参画、医療機関との共同研究等々を活動の骨格として実践してきている。換言すれば、医療福祉社会情報基盤の設計と構築を目指して活動している。

「病気を診るだけでなく、病人も診る」と言われて久しいが、現実問題として医療従事者側・利用者側からのそれぞれの視点に見られる医療情報に対する認識の乖離は否めない。EBM<sup>(\*)</sup>や先端医学のさらなる発展の重要性はいうまでもないが、QOL<sup>(\*\*)</sup>を含め患者やご家族の正確な医療情報の入手と活用のために微力を傾注したい。

理事会 (2001年8月)



(\*1) EBM: Evidence-based Medicine (根拠に基づく医療)

(\*2) QOL: Quality of Life (生活の質)



第1回講演会 (2001年9月)

ホームページ

<http://www.qmei.jp>



総会 (2001年1月)



パネル展示と発表・東大安田講堂 (2000年11月)